日蓮大聖人御書全集

四条金吾殿御返事（しじょうきんごどのごへんじ）

（梵音声の事（ぼんのうじょうこと））

新版1523～1529

四条金吾殿御返事（梵音声の事）

文永9年（'72）9月　51歳　四条金吾

夫れ、斉の桓公と申せし王、紫をこのみて服給いき。楚の荘王といいし王は、女の腰のふときことをにくみしかば、一切の遊女、腰をほそからせんがために、餓死しけるものおおし。しかれば、一人の好むことをば、我が心にあわざれども、万民随いしなり。たとえば、大風の草木をなびかし、大海の衆流をひくがごとし。風にしたがわざる草木は、おれうせざるべしや。小河、大海におさまらずば、いずれ

のところにおさまるべきや。国王と申すことは、先生に万人にすぐれて大戒を持ち、天地および諸神ゆるし給いぬ。その大戒の功徳をもちて、その住むべき国土を定む。二人三人等を王とせず。地王・天王・海王・山王等、ことごとく来臨してこの人をまぼる。いかにいわんや、その国中の諸民、その大王を背くべしや。

この王は、たとい悪逆を犯すとも、一・二・三度等には左右なくこの大王を罰せず。ただし、諸天等の御心に叶わざるは、一往は天変地天等をもちてこれをいさむ。事過分す

れば、諸天善神等、その国土を捨離し給う。もしは、この大王の戒力つき、期来って国土のほろぶることもあり。また逆罪多くにかさなれば、隣国に破らるることもあり。善悪に付いて、国は必ず王に随うものなるべし。

世間かくのごとし、仏法もまたしかなり。仏陀すでに仏法を王法に付し給う。しかれば、たとい聖人・賢人なる智者なれども、王にしたがわざれば、仏法流布せず。あるいは後には流布すれども、始めには必ず大難来る。

迦弐志加王は仏の滅後四百余年の王なり。健陀羅国を

掌（たなごころ）のうちにぎり（握）り。五百（ごひゃく）の阿羅漢（あらかん）を帰依（きえ）して婆沙論（ばしゃろん）二百巻（にひゃっかん）をつくらし（造）む。国中（こくちゅう）すべて小乗（しょうじょう）なり。その国（くに）に大乗弘（だいじょうひろ）めがたかりき。発舎密多羅王（ほっしゃみったらおう）は五天竺（ごてんじく）を随（したが）えて仏法（ぶっぽう）を失（うしな）い、衆僧（しゅそう）の頸（くび）を斬（きる）。誰（たれ）の智者（ちしゃ）も叶（かな）わず。太宗（たいそう）は賢王（けんおう）なり。玄奘三蔵（げんじょうさんぞう）を師（し）として法相宗（ほっそうしゅう）を持（たも）ち給（たま）いき。誰（たれ）の臣下（しんか）かそむ（背）きし。この法相宗（ほっそうしゅう）は、大乗（だいじょう）なれども、五性各別（ごしょうかくべつ）と申（もう）して、仏教（ぶっきょうちゅう）中（ちゅう）のおおき（大）なるわざわい（禍）と見（み）えたり。なお外道（げどう）の邪法（じゃほう）にもすぎ（過）、悪法（あくほう）なり。月支（がっし）・震旦（しんたん）・日本（にほん）、三国（さんごくとも）共（とも）にゆるさ（許）ず。終（つい）に日本国（にほんこく）にして伝教大師（でんぎょうだいし）の

御手にかかりて、この邪法止め畢わんぬ。大いなるわざわいなれども、太宗これを信仰し給いしかば、誰の人かこれをそむきし。

真言宗と申すは、大日経・金剛頂経・蘇悉地経による。これを大日の三部と号す。玄宗皇帝の御時、善無畏三蔵・金剛智三蔵、天竺より将ち来れり。玄宗これを尊重し給うこと、天台・華厳等にもこえたり。法相・三論にも勝れて思しめすが故に、漢土はすべて大日経は法華経に勝るとおもい、日本国当世にいたるまで、天台宗は真言宗に劣るな

りとおもう。彼の宗を学する東寺・天台の高僧等、慢過慢をおこす。ただし、大日経と法華経とこれをならべて、偏党を捨ててこれを見れば、大日経は蛍火のごとく、法華経は明月のごとく、真言宗は衆星のごとく、天台宗は日輪のごとし。偏執の者云わく「汝いまだ真言宗の深義を習いきわめずして、彼の無尽の科を申す」。ただし、真言宗、漢土に渡って六百余年、日本に弘まって四百余年、この間の人師の難・答あらあらこれをしれり。伝教大師一人この法門の根源をわきまえ給う。しかるに、当世日本国第一の科

これなり。勝をもって劣と思い、劣をもって勝と思うの故に、大蒙古国を調伏する時、還って襲われんと欲す、これなり。

華厳宗と申すは、法蔵法師が立つるところの宗なり。則天皇后の御帰依ありしによりて、諸宗肩をならべがたかりき。

しかれば、王の威勢によりて宗の勝劣はありけり。法に依って勝劣はなきようなり。たとい深義を得たる論師・人師なりというとも、王法には勝ちがたきゆえに、たまた

ま勝たんとせし仁は大難にあえり。いわゆる、師子尊者は檀弥羅王のために頸を刎ねらる。提婆菩薩は外道のために殺害せらる。竺の道生は蘇山に流され、法道三蔵は面に火印おされて江南に放たれたり。

しかるに、日蓮は法華経の行者にもあらず、また僧侶の数にもいらず。しかれども、世の人に随って阿弥陀仏の名号を持ちしほどに、阿弥陀仏の化身とひびかせ給う善導和尚云わく「十は即ち十生じ、百は即ち百生ず乃至千の中に一りも無し」。勢至菩薩の化身とあおがれ給う法然

上人、この釈を料簡して云わく「末代に念仏の外の法華経等を雑うる念仏においては、千の中に一りも無し。一向に念仏せば、十は即ち十生ず」云々。日本国の有智・無智、仰いでこの義を信じて今に五十余年、一人も疑いを加えず。ただ日蓮の諸人にかわるところは、「阿弥陀仏の本願には『ただ五逆と誹謗正法とのみを除く』とちかい、法華経には『もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん』と説かれたり。これ、善導・法然、謗法の者な

れば、たのむところの阿弥陀仏にすてられおわんぬ。余仏・余経においては、我と抛ちぬる上は救い給うべきに及ばず。法華経の文のごときは、無間地獄疑いなし」と云々。しかるを、日本国はおしなべて彼らが弟子たるあいだ、この大難まぬかれがたし。無尽の秘計をめぐらして日蓮をあだむ、これなり。

前々の諸難はさておき候いぬ。去年九月十二日、御勘気をかぶりて、その夜のうちに頭をはねらるべきにてありしが、いかなることにやよりけん、彼の夜は延びて、この国に

来っていままで候に、世間にもすてられ、仏法にもすてられ、天にもとぶらわれず、二途にかけたるすてものなり。

しかるを、いかなる御志にてこれまで御使いをつかわし、御身には一期の大事たる悲母の御追善第三年の御供養を送りつかわされたること、両三日はうつつともおぼえず。彼の法勝寺の執行が、いおうが島にてとしごろつかいける童にあいたりし心地なり。胡国の夷・陽公といいしもの、漢土にいけどられて北より南へ出でけるに、飛びちがいける雁を見てなげきけんも、これにはしかじとおぼえたり。

ただし、法華経に云わく「もし善男子・善女人、我滅度して後、能くひそかに一人のためにも、法華経の乃至一句を説かば、当に知るべし、この人は則ち如来の使いにして、如来に遣わされて、如来の事を行ず」等云々。法華経を一字一句も唱え、また人にも語り申さんものは、教主釈尊の御使いなり。しかれば、日蓮、賤しき身なれども、教主釈尊の勅宣を頂戴してこの国に来れり。これを一言もそしらん人々は罪を無間に開き、一字一句も供養せん人は無数の仏を供養するにもすぎたりと見えたり。

教主釈尊は一代の教主、一切衆生の導師なり。八万法蔵は皆金言、十二部経は皆真実なり。無量億劫より以来持ち給いし不妄語戒の所詮は、一切経これなり。いずれも疑うべきにあらず。ただし、これは総相なり。別して尋たずぬれば、如来の金口より出来して、小乗・大乗、顕・密、権経・実経これあり。今この法華経は、仏、「正直に方便を捨つ」等、乃至「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」と説き給うことなれば、誰の人か疑うべきなれども、多宝如来証明を加え、諸仏舌を梵天

に付け給う。

されば、この御経は、一部なれども三部なり、一句なれども三句なり、一字なれども三字なり。この法華経の一字の功徳は、釈迦・多宝・十方の諸仏の御功徳を一字におさめ給う。たとえば如意宝珠のごとし。一珠も百珠も同じきことなり。一珠も無量の宝を雨らす。百珠もまた無尽の宝あり。たとえば、百草を抹って一丸乃至百丸となせり。一丸も百丸も、共に病を治することこれおなじ。譬えば、大海の一滴も衆流を備え、一海も万流の味をもてるがごとし。

妙法蓮華経と申すは総名なり。二十八品と申すは別名なり。月支と申すは天竺の総名なり。別しては五天竺これなり。日本と申すは総名なり。別しては六十六州これあり。如意宝珠と申すは釈迦仏の御舎利なり。竜王これを給わって頂上に頂戴して、帝釈これを持って宝をふらす。仏の身骨の如意宝珠となれるは、無量劫来持つところの大戒身に薫じて骨にそみ、一切衆生をたすくる珠となるなり。たとえば、犬の牙の虎の骨にとく、魚の骨の鸕の気に消ゆるがごとし。乃至、**師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾け**

ば、余の一切の獣の筋の絃、皆きらざるにやぶる。仏の説法をば師子吼と申す。乃至、法華経は師子吼の第一なり。

仏には三十二相そなわり給う。一々の相、皆百福荘厳なり。肉髻・白毫なんど申すは菓のごとし。因位の花の功徳等と成って三十二相を備え給う。乃至、無見頂相と申すは、釈迦仏の御身は丈六なり。竹杖外道は釈尊の御長をはからず。御頂を見奉らんとせしに、御頂を見たてまつらず。応持菩薩も御頂を見たてまつらず。大梵天王も御頂をば見たてまつらず。これはいかなるゆえぞとたず

ぬれば、父母・師匠・主君を、頂を地につけて恭敬し奉りしゆえにこの相を感得せり。

乃至、梵音声と申すは仏の第一の相なり。小王・大王・転輪王等、この相を一分備えたるゆえに、この王の一言に、国も破れ、国も治まるなり。宣旨と申すは、梵音声の一分なり。万民の万言は一王の一言に及ばず。則ち三墳五典なんど申すは、小王の御言なり。この小国を治め、乃至大梵天王、三界の衆生を随うること、仏の大梵天王・帝釈等をしたがえ給うことも、この梵音声なり。

これらの梵音声、一切経と成って一切衆生を利益す。その中に、法華経は、釈迦如来の御志を書き顕して、この音声を文字と成し給う。仏の御心はこの文字に備われり。たとえば、種子と苗と、草と稲とはかわれども、心はたがわず。釈迦仏と法華経の文字とはかわれども、心は一つなり。しかれば、法華経の文字を拝見せさせ給うは、生身の釈迦如来にあいまいらせたりとおぼしめすべし。

この志、佐渡国までおくりつかわされたること、すでに釈迦仏知ろしめし畢わんぬ。実に孝養の詮なり。恐々

謹言。（きんげん）

文永九年（ぶんえいくねん）　月　日

四条三郎左衛門尉殿（しじょうさぶろうざえもんのじょうどのごへんじ）御返事

日蓮（にちれん）　花押（かおう）